

張伯英『法帖提要』訓注稿（11）

澤田雅弘、安藤喜紀、小西優輝、伊藤正紀、大野 愛、和田勝美、長谷川翔一
村田 萌、長村恵子、庄子滉一、滑田一輝、王 思暢、陶 坤

大学院書道学専攻博士課程前期課程の開設授業「中国書学演習」(澤田担当)のテキストとした張伯英『法帖提要』(筆写原稿。『統修四庫全書総目提要』所収)の内17項目を訓読し注を付したものである。原稿は、受講者それぞれが担当項目を整え、注を付したが、訓読については澤田が点検した。執筆者名は、各項末の()内に記した。なお、原稿の取りまとめには、村田が当たった。(澤田)

【No230】

詒晋齋巾箱帖¹十六卷 成邸本

清成親王永理書。嘉慶十二年錢泳摹刻四卷。名巾箱帖。十六年三月增刻四卷。曰集錦帖。十七年三月增刻四卷、曰藏帖。十七年六月又增四卷。曰藏真帖。後三種皆袁治²摹。以其均為小冊。故統謂之巾箱帖。錢泳題³云。成親王書。博涉諸家。而尤深於趙榮祿(孟頫)。因榮祿而直追羲獻。從羲獻而退入歐虞。精心四十余年。極尽變化。仲尼七十從心。右軍晚年多妙。將來不知又當何如。英和題云。詒晋齋種種法書。沾被芸林。蓋以天縱之才。兼筆塚墨池之功。故能為翰墨中金科玉律。石刻之富。古未有也。董誥題云。成邸書陶冶百家。包含衆有。殆合鍾王虞歐趙董為一手。我用我法。不主故常。而實無非古人妙處。所謂具十二種意外巧妙⁴也。諸家稱美可謂盡致。惟成邸書究能當此而無愧耶。抑揄揚太過未足為定評耶。又黃鉞題云。筆墨之故通乎性情⁵。米南宮蕭閒堂記⁶。有愉悅之色。蕭閒堂記。海嶽偽蹟。備極塵俗之狀。左田亦復稱道及之。真味於鑑古者。成邸於鑑別古書頗精。而此所臨。乃有山谷梅花詩何也⁷。全帖摹印工美。足供玩賞。晚擲則不逮矣。清の成親王永理(1752~1823)の書。嘉慶十二年(1807)錢泳(1759~1844)四卷を摹刻し、巾箱帖と名づく。十六年三月四卷を増刻し、集錦帖と曰う。十七年三月四卷を増刻し、藏帖と曰う。十七年六月又た四卷を増し、藏真帖と曰う。後の三種は皆な袁治の摹。其の均しく小冊を為すを以ての、故に統て之を巾箱帖と謂う。錢泳題して云う、「成親王の書は、博く諸家の渉るも、而れども尤も趙榮祿に深し。榮祿に因りて直ちに羲獻を追い、羲獻より退きて歐虞に入る。心を精しくすること四十余年、極めて變化を尽くす。仲尼は七十にして心に従い、右軍は晩年に妙多ければ、將來又た當に何如なるべきやを知らず」と。英和(1771~1840)題して云う、「詒晋齋の種種の法書は、芸林を沾被す。蓋し天縱の才を以て、筆塚墨池の功を兼ね。故に能く翰墨中の金科玉律と為る。石刻の富めるは、古未だ有らざるなり」と。董誥(1740~1818)題して云う、「成邸の書は百家を陶冶し、包含するもの衆く有り。殆ど鍾王虞歐趙董を合わせて一手と為す。我 我が法を用い、故常を主とせず。而れども實に古人の妙處に非ざるは無し。所謂 十二種の意外の巧妙を具うるなり」と。諸家の稱美は尽致と謂うべし。惟だ成邸の書は究に能く此に当たりて愧ずる無きや。抑そも揄揚太だ過ぎて未だ定評と為すに足らずや。又た黃鉞(1750~1841)題して云う、「筆墨は之れ故より性情に通ず。米南宮(芾)の蕭閒堂記は、愉悅の色有り」と。蕭閒堂記は、海嶽の偽蹟にして、備に塵俗の狀を極む。左田(黃鉞の字)も亦た復た稱道して之に及ぶ。真に鑑古に味き者なり。成邸は古書を鑑別するに於て頗る精し。而れども此の臨する所に、乃ち山谷の梅花詩有るは何ぞや。全帖は摹印工美。玩賞に供するに足る。晚擲は則ち逮ばず。

[注]

- 1 詒晋齋巾箱帖十六卷：『叢帖目4』には巾箱帖、集錦帖、藏真帖、藏帖各4卷に分載する。
- 2 袁治：呉郡の人。その所刻の刻帖には他に詒晋齋書5卷(嘉慶9年、陳伯玉と分担)、南韻齋帖4卷(榮郡王錦億の書)、詒晋齋摹古帖10卷があるほか、程章燦『石刻刻工研究』所掲石刻に、何双溪繼室梁氏家伝(乾隆55年)から文昌帝君陰騭文(嘉慶8年)に及ぶ5種がある。

- 3 錢詠題：未検。後出の英和・董誥・黃鉞の各題も同様に未検。該帖未見につき該帖中の各題の所在も不詳。
- 4 十二種意外巧妙：南宋・姜夔『絳帖平』巻2に「鍾繇書有十二種、意外巧妙。」とみえるが、そもそもは梁・武帝『觀鍾繇書法十二意』(法書要録巻2)に「平(謂横也)・直(謂縱也)」以下十二種の用意を列し「字外之奇、文所不書。」といい、梁・袁昂『古今書評』に「鍾司徒(繇)書、字十二種、意外殊妙、實亦多奇。」に基づく。
- 5 筆墨之故通乎性情：清・趙文哲『媿雅堂詩續集』(乾隆56刊)巻3「題倪穉疇給諫七芳圖有序」に「乙酉秋中過敬堂太僕古雪軒、出示尊甫穉疇先生七芳圖遺冊、筆墨之故通乎性情、馬遷所謂其志潔、其行芳者。」の例がある。
- 6 米南宮蕭間堂記：『渤海藏真帖』第四冊。附虞集、柯九思、米友仁書法題跋。
- 7 有山谷梅花詩何也：『叢帖目4』に分載する計16巻の書跡目には見えない。また、『叢帖目4』所収の永理專帖にも見えない。張伯英所見本、容庚所見本の間に増減があったか。なお、京都国立博物館所蔵に康熙帝臨黃庭堅梅花軸(一枝玉剪々氷裳を起句とする七絶)がある。永理に梅花詩の臨書があるのは康熙帝に臨書があることに因むか。

(澤田雅弘)

【No231】

惟清齋法帖十四巻¹ 長白鉄氏本

清鉄保書。其子瑞元摹勒。保字冶亭。号梅庵。臨唐宋各家書四卷。統臨晋唐書一卷。嘉慶丙子刻成。又統臨各家小楷一卷。嘉慶戊寅補刻。余為梅翁自書八卷。則官兩江總督及漕運總督時²所書為多。梅翁自題³云。余甲戌謫吉林。老屋數椽。足蔽風雨。暮年昏瞶瞶。不耐酬応。鍵戸兀坐。聊以筆札自遣。顛沛之中。興復不淺。因寄元兒藏之。不過欲存老年精神。非敢出以問世。乃元兒竟摹上石。余滋愧矣。舛誤甚繁。觀者諒之。又跋所臨小楷⁴云。余備員兩江時。湖河並漲。安省蛟水又發。竭力堵築⁵。与河伯争四十余日。不能安枕。兩目昏暗。不能作書。後雖漸明。猶不能作小楷。今戌吉林。閉門思過。目力竟明。对古小楷。鎮日臨摹。近作數種。付元兒彙前臨各家行草。合為六卷。古人云。生於憂患死於安樂⁶。此明徵也。梅庵小楷。工力之深。過於行草。独所臨褚河南清娛志⁷。米書蕭間堂記及易義⁸。皆不知其為偽。又臨長史東明帖題⁹云。世以顛素並稱。長史雄厚渾穆。直入山陰之室。素師不能及。東明帖非長史筆。梅翁此評不足為拋。其書可与成邸相並。小楷更出其上。至鑑別真偽。非所長矣。

清の鉄保(1752~1824)の書。其の子の瑞元の摹勒。保は字は冶亭。号は梅庵。唐宋各家の書を臨する四巻、続けて晋唐の書を臨する一卷は、嘉慶丙子(21年 1815)刻成す。又た続けて各家の小楷を臨する一卷は、嘉慶戊寅(23年)補刻す。余(のこり)は梅翁の自書八巻と為す。則ち兩江總督及び漕運總督に官する時の書する所多しと為す。梅翁の自題に云う、「余甲戌(嘉慶19年)吉林に謫せられ、老屋數椽、風雨を蔽うに足る。暮年昏瞶し、酬応に耐えず。戸に鍵して兀坐し、聊か筆札を以て自ら遣る。顛沛の中、興復た浅からず。困りて元兒に寄せて之を蔵せしむ。」「老年の精神を存せんと欲するに過ぎず、敢て出して以て世に問うに非ず。乃ち元兒 竟に摹して上石す。余 滋ます愧ず。舛誤甚だ繁し。観る者 之を諒せよ」と。又た臨する所の小楷に跋して云う、「余 員に兩江に備へらるる時、湖河並びに漲り、安省 蛟水又た發し、力を竭して堵築し、河伯と争うこと四十余日、枕を安んずる能わず、兩目昏暗にして、書を作る能わず。後漸く明るしと雖も、猶お小楷を作る能わず。今 吉林に戌せられ、門を閉して過ちを思えば、目力竟に明るく、古の小楷に対して、鎮日臨摹す。近作の數種、元兒に付して前に臨せし各家行草を彙めて、合して六巻と為す。古人云う、憂患に生き安樂に死すとは、此の明徵なり。梅庵の小楷、工力の深きこと、行草に過ぐ。独り臨する所の褚河南の清娛志、米書の蕭間堂記及び易義は、皆な其の偽為るを知らず。又た長史(張旭)の東明帖を臨して題して云う、「世 顛(張旭)素(懷素)を以て並稱するも、長史は雄厚渾穆にして、直ちに山陰(王羲之)の室に入る。素師は及ぶ能わず」と。東明帖は長史の筆に非ず。梅翁の此の評は拋と為すに足らず。其の書は成邸(成親王永理)と相並ぶべく、小楷は更に其の上に出づるも、真偽を鑑別するに至りては、長ずる所に非ず。

[注]

- 1 惟清齋法帖十四巻：『叢帖目4』「惟清齋手臨各家法帖4巻統臨2巻」(嘉慶21年、其子元瑞撰集)には、「吳県支雲從、翰茂齋張錫齡鑄。」とみえる。

- 2 官両江総督及漕運総督時：『清代職官年表』総督によれば、両江総督は嘉慶10年正月辛亥の就任から14年7月壬申に革められるまで、漕運総督は嘉慶4年12月壬申の就任から7年11月辛卯に広東巡撫に改められるまで。
- 3 梅翁自題：叢帖目所掲との異同は多い。「足蔽風雨」の後に「曾為大夫、不可徒行」、「鍵戸兀坐」の後に「靜極思動」、「聊以筆札自遣」の後に「目力漸昏、不能細書、漫臨行草數種」がある。さらに「顛沛之中。興復不淺。因寄元兒藏之。」は「寄元兒藏之。知老夫顛沛之中。興復不淺。非徒以家鷄示愛也。」となって、続けて「晋以前高遠、不可機及。元以後又未免近於姿媚、均不臨入。其他如虞柳黃蔡諸家、因案頭無帖、姑闕之以俟他日云。乙亥(嘉慶20年)三月、識於吉林小寓。鉄保。時年六十有四。」がある。「不過欲存老年精神。非敢出以問世。乃元兒竟摹上石。余滋愧矣。舛誤甚繁。觀者諒之。」は、又跋に見え、若干の文字の異同と「余滋愧矣」と「舛誤甚繁」の間に「成事不説、姑毋深論。内多不經意之作」がある。
- 4 跋所臨小楷：『叢帖目』未掲。
- 5 備員両江時…竭力堵築：たとえば『清史稿』卷353鉄保伝に「十年、擢両江総督、…十四年、運河屢壞隄、…詔斥鉄保偏聽固執、河工日壞、吏治日弛、釀成重獄、褫職、遣戍烏魯木齊。…」。
- 6 生於憂患死於安樂：『孟子』告子下に「生於憂患而死於安樂」とみえ、後世、陸九淵『象山先生文集』卷8「与蘇宰」に「故曰、生於憂患而死於安樂。古人之處憂患者、又豈止如門下今日所遭而已哉。」王士禎『帶經堂集』卷45「張為仁墓表」に「其教子姪曰、吾生平得力數言而已、生於憂患死於安樂。」のように多用された。
- 7 臨褚河南清娛志：惟清齋手臨各家法帖4卷の卷1所収。
- 8 米書蕭閒堂記及易義：臨蕭閒堂記は惟清齋手臨各家法帖卷4所収。蕭閒堂記は『渤海藏真帖』卷4所収。臨易義は惟清齋手臨各家法帖4卷統臨2卷に未収。易義は『戲鴻堂帖』卷13所収。なお、両米書が偽跡であることについては、『法帖提要』米南宮十紙説の項にも「此与戲鴻堂易義、渤海藏真蕭閒堂記、似出一手、…」と論ずる。
- 9 長史東明帖：東明帖は庾信・謝靈運の各2詩を書いた狂草「古詩四帖」(墨跡本は遼寧省博物館所蔵)。東明は冒頭の「東明九芝蓋」に因る。東明は神仙の名。董其昌が張旭書とし『戲鴻堂帖』(卷7)に刻入して以来、張旭の書とする説が通行するが、徐邦達が『古書畫偽訛考弁』(1984)に歩虚詞の「玄水」を「丹水」に作るのは、宋の始祖趙玄朗の玄の避諱とみて、大中祥符(1008~16)以後の作とし張旭説を否定する。なお、鉄保自題は『惟清齋全集』に未収。

(澤田雅弘)

【No232】

酣古堂法書四卷¹

清穆大展²刻。無卷數次第。黄山谷題武昌松風閣詩一卷。鮮于困学草書一卷³。祝枝山自書詩二卷⁴。松風閣詩。三希堂所摹⁵涪翁真迹。此本字之大小相同。書則遠遜。山谷書筆筆凌空。毫無俗韻。此刻平庸已極。無一字一筆不俗。刻者或不曾見三希堂帖。然雅俗之分何待比較。以之為黃書。其誣山谷甚矣。凡古人所伝書畫。每有一種。則臨仿不可數計。出自双鉤填墨。尚有書者形貌。若縱筆臨写。雖間有相似之字。而筆法絕無影響。其俗状使人不可耐。無目者從而賞異之。刻帖行世。遺誤後学。是以每遇此種不憚瑣瑣致弁。世之能別真偽。有幾人哉。困学草書。首尾皆稍損欠。有楊循吉⁶王寵⁷觀款。氣力雄健。是其合作。枝山自書詩。奇逸跌宕。視其他伝書為勝。跋云⁸。辛巳春過漂陽。仲虚⁹拏舟遠送。偶有此卷。漫為点染。既了卻有愧。然而平生抱此愧亦多矣。語似自謙而實自負。此帖若止刻困学枝山二種。非不可觀。其摹勒洵非庸手。山谷松風閣詩。直應刪汰。真偽淆雜。最令人為之不快。三希真本具在。夫安用此。困学書後。有玩松穆大展鐫。余無題識。何人選定。亦無從考矣。

清の穆大展の刻。卷數の次第無し。黄山谷(庭堅)の武昌松風閣に題する詩一卷、鮮于困学(樞)の草書一卷、祝枝山(允明

1460～1526)の自書詩二卷。松風閣詩は、三希堂の摹する所は涪翁(黄庭堅)の真迹なるも、此の本字の大小相い同じきも、書は則ち遠く遜る。山谷の書は筆筆空を凌ぎて、毫も俗韻無し。此の刻の平庸なること已に極まり、一字一筆として俗ならざる無し。刻者曾て三希堂帖を見ざる或り。然らば雅俗の分何ぞ比較を待たん。之を以て黄書と為せば、其れ山谷を誣うること甚だし。凡そ古人の伝うる所の書画、毎に一種有れば、則ち臨仿すること数もて計うべからず。双鉤填墨より出づれば、尚お書者の形貌有り。縦いままに筆もて臨写するが若きは、間ま相似るの字有りと雖も、筆法は絶えて影響無からん。其の俗状は人をして耐うべからざらしむ。目無き者従いて之を賞異し、刻帖世に行わるれば、誤りを後学に遺す。是を以て毎に此の種に遇えば瑣瑣として弁を致すことを憚らず。世の能く真偽を別かつもの、幾人有らんや。困学の草書、首尾皆な稍や損欠す。楊循吉 王寵の觀款有り。氣力雄健にして、是れ其の合作。枝山の自書詩は、奇逸跌宕。其の他の伝うる書と視ぶれば勝ると為す。跋に云う、「辛巳(正徳16年 1521)の春 溧陽を過ぎり、仲虚と拏舟して遠く送る。偶たま此の卷有り。漫らに点染を為し、既に了って卻って愧有り。然り而して平生より此の愧を抱くこと亦た多からん。」と。語は自謙するが似くして実は自負す。此の帖 若し止だ困学 枝山二種のみを刻せば、観るべからざるに非ず。其の摹勒は洵に庸手に非ず。山谷の松風閣詩は、直ちに応に刪汰すべし。真偽淆雜するは、最も人をして之が為に不快ならしむ。三希の真本 具に在れば、夫れ安くんぞ此を用いん。困学の書後に、「玩松穆大展の鐫」有り。余に題識無ければ、何れの人の選定なるや、亦た従りて考う無し。

[注]

- 1 耐古堂法書四卷：『叢帖目2』に「帖名隸書」とある。刻成時期は『商舶載来書目』に享和3年(1803)に日本に輸入された記録があり、これ以前の刻成と考えられる。
- 2 穆大展：1721～1812。名は近文。大展は字。また孔成。号は玩松居士。金陵の人。三代に及んで金石収集を行ったとされる。『清代伝記叢刊』未収。『叢帖目2』に「穆大展曾於乾隆三十五年刻仁聚堂法帖。」と見え、この仁聚堂法帖は「仁聚堂法帖」(『法帖提要』No207)の注1を参照。
- 3 鮮于困学草書一卷：未検。
- 4 祝枝山自書詩二卷：『叢帖目2』は「龍川山中早行」「峽山寺」「神光山」「惠州西湖」「龍婦洞詩」で1卷、「循州春雨」「戲作口号」「北郊訪友」「過林頭看修竹數里不斷甚愛戲題」「縣齋詩並跋」で1卷とする。「龍川山中早行」は『祝氏集略』卷4所収。「惠州西湖」「循州春雨」「戲作口号」「北郊訪友」「過林頭看修竹數里不斷甚愛戲題」は同卷6所収。「峽山寺」「神光山」は同卷7所収。「龍婦洞詩」は同卷7所収の「題龍婦洞」か。「縣齋詩並跋」の「縣齋詩」は同卷6に「縣齋」の題で所収なるも跋は未検。墨蹟本は『中国書法大辞典』「祝允明草書詩稿」項に所収。「正徳辛巳(1521)過溧陽時贈友人仲□者。……用筆生辣蒼厚、蓋其暮年精心之作。卷為恩祝堂所藏、有正書局有石印本。」とある。
- 5 三希堂所摹：三希堂石渠宝笈帖(『説帖』No37)第13冊所収。
- 6 楊循吉：1458～1546。字は君卿または君謙、号は南峰。成化20年(1484)の進士。
- 7 王寵：1494～1533。字は履仁、のち履吉、別号に雅宜山人。江蘇省蘇州の人。度々科挙に応じたが及第しなかった。
- 8 跋云：未検。
- 9 仲虚：狄冲(生歿年不詳)。仲虚は字。溧陽の人。嘉靖2年(1523)の進士。武定知州、瑞州に調せられた。著に『春溪詩集』がある。『溧陽狄氏進士名録』に見える。『祝氏集略』卷5に「孟玉礪画瓜」があり、「溧陽夜燕来仲虚 狄冲、示我玉礪画瓜図。嫣綿生意好手筆、燈前摸索聊為娛。爾日南至氣轉紓、我心之喜君知無。黄台離離幾抱蔓、野田倘有青門夫。焉知大隄方包杞、含章隕天天下理。天地相逢与子起、品物咸章自此始。」と見える。

(安藤喜紀)

【No233】

貞隱園法帖十卷¹ 南海葉氏本

明郭秉詹書²。秉詹字廷執。工書法。隱居不仕。龍溪李威³藏其縮臨古帖十卷。嘉慶壬申。李守広州。屬葉夢龍⁴覓工精刻。夢龍字雲谷。跋云⁵。前明郭廷執氏。專精篆画。旁通諸体。鳳岡先生来典広郡。出所藏臨古帖十冊。各臻精妙。青巖謝

君⁶以六書世其家。而善運鉄筆。倩其鑄石。甲卷。夏岫嘯碑、珣戈、商鍾鼎彝器三十余通。乙卷。周二十二通。丙卷。周二十四通。丁卷。周秦漢金石文十二通。戊卷。漢彝器及名人書二十八通。己卷。魏晉十三家書。庚卷。晉宋齊梁隋唐十一家書。辛卷。唐十五家書。壬卷。宋元明十三家書。癸卷。明七家書。張維屏楷書目錄於前。郭氏深於篆學。惟所臨古篆。大概依拠鍾鼎款識等書。而非尽原器搨本。故筆法皆兩頭尖細者。此自三体石經⁷。已肇其端。不容以責郭氏也。列瘞鶴銘於唐⁸。謂其書少骨氣。其詞與筆俱當歸之唐時。則其鑒古之謬。鶴銘為陶隱居⁹書。確無疑義。其氣骨豈唐所能到。他所題識。未有發明。郭氏於臨仿之工頗深。而鑒古之識殊淺。所臨行草。每雜用閣帖中偽蹟。是其一失。但摹古各具形貌。已非有甚深之工力。不能逮此。鑄刻之美。可與相稱。亦芸林雅玩矣。

明の郭秉詹の書。秉詹は、字は廷執、書法に工。隱居して仕えず、龍溪の李威 其の縮臨古帖十卷を蔵す。嘉慶壬申(17年1812)、李 広州に守たりしとき、葉夢龍(1775~1832)に属して工を覓めて精刻せしむ。夢龍は、字は雲谷、跋に云う、「前明の郭廷執氏、専ら篆画に精しく、旁ら諸体に通ず、鳳岡先生来りて広郡に典どるとき、蔵する所の臨古帖十冊を出だす。各おの精妙に臻る。青巖謝君 六書を以て其の家を世よにす、而して善く鉄筆を運び、其を倩い鑄石せしむ」と。甲卷は夏の岫嘯碑、珣戈、商の鍾鼎彝器三十余通。乙卷は周の二十二通。丙卷は周の二十四通。丁卷は周、秦、漢の金石文十二通。戊卷は漢の彝器及び名人の書二十八通。己卷は魏、晋十三家の書。庚卷は晋、宋、齊、梁、隋、唐十一家の書。辛卷は唐の十五家の書。壬卷は宋、元、明十三家の書。癸卷は明の七家の書。張維屏(1780~1859) 目錄を前に楷書す。郭氏は篆學に深し、惟だ臨する所の古篆は、大概 鍾鼎款識等の書に依拠するも、尽くは原器の搨本に非ず。故に筆法は皆な兩頭尖細なる者なり。此れ三体石經より已に其の端を肇め、容に以て郭氏を責むべからざるなり。瘞鶴銘を唐に列して、其の書 骨氣少なく、其の詞は筆と俱に當に之を唐時に歸すべしと謂うは、則ち其れ鑒古の謬。鶴銘 陶隱居の書と為すは確かに疑義無し。其の氣骨は豈に唐の能くする所ならん。他の題識する所は未だ發明有らず。郭氏は臨仿の工に於ては頗る深きも、鑒古の識は殊に浅し。臨する所の行草 毎に閣帖中の偽蹟を雜用するは、是れ其の一失。但だ摹古は各おの形貌を具う。已に甚深の工力に有るに非ずんば此に逮ぶ能わず。鑄刻の美 与に相い称うは、亦た芸林の雅玩なり。[注]

- 1 貞隱園法帖十卷：『叢帖目4』に所収。
- 2 郭秉詹：晋江の人。号に蔗庵、霞嶼がある。
- 3 李威：龍溪(福建)の人。字は畏吾、述堂。号は鳳岡。乾隆43年(1778)の進士。『叢帖目4』に、癸酉(1813)3月に書かれた150字余りの跋がある。
- 4 葉夢龍：広東南海(広州)の人。官は戸部郎中。法帖提要No.82(袖珍蘭亭1卷注)参照。金石書画を嗜み所蔵に富んだ。父の葉建勳も書画を取蔵し、翁方綱、伊秉綬と『風滿樓叢帖』をつくった。
- 5 跋云：『叢帖目4』の葉夢龍の跋部には「旁通諸体」の後に「歲壬申(1812)」とあり、「出所蔵臨十冊」の前に「公余」とある。また「出所蔵臨十冊」は「出所郭氏蔵臨十冊」とあり、後ろは「篆居其半、鍾鼎古文無不縮入寸簡、行楷諸体仍以篆法出之」と続く。また「而善運鉄筆」の後に「先生倩青巖鑄諸石」とある。
- 6 青巖謝君：謝青巖(1756~1831)。字は倬士、青巖はその号。篆刻に秀でた。法帖提要No.82(袖珍蘭亭一卷注)参照。
- 7 三体石經：魏(240~49)の正始石經。「書經」、「春秋」、「左伝」の一部で、一字を古文、小篆、八分に書き分けているのでその名がある。
- 8 列瘞鶴銘於唐：辛卷 唐十五家書に所収。
- 9 陶隱居：陶弘景(451~536)。字は通明、号は華陽道人、江蘇省秣陵の人。

(小西優輝)

【No.234】

三松堂墨刻八卷¹

清潘奕雋²書。奕雋字榕臯。乾隆己丑進士。第一卷。臨漢章帝、崔子玉、張芝、鍾太傅、索靖、庾元亮、王右軍、王恬、王操之、王渙之、王猷之、謝璠伯、謝兪、王曇首、謝莊。自題云³。借觀棊几齋閣帖。節臨數則。第二卷。臨唐太宗、虞

世南、歐陽詢、褚遂良、徐嶠之、李邕、宋儋、顏魯公、柳公權。第三卷。臨蘇文忠、米南宮、米書皆臨陸謹庭⁴所藏之紹興米帖⁵。第四卷。臨張東海、劉廷美、文徵明、王濟之、第五卷。臨趙子昂、董香光、第六卷。臨董香光。第七卷。書少陵詩。第八卷。潘世璜⁶臨董書。榕臯學董書平実少變化。蓋天資遜於工力。至其篤學嗜古。根柢深厚。筆墨無俗氣。則學人之書。自具一格。不必以八法相繩。與書家挈長較短也。夫帖之為用。有足資臨仿者。有僅備觀覽者。後人珍守先沢。凡有力者往往刻其遺墨。期傳永久。此僅備觀覽之帖。非學書所必需。然亦足規其人學力之淺深。而所書亦自不可廢。非惟近賢所書。当作如是觀。即叢刻中所列古人遺墨。亦有重其人重其學。而非尽属書法之美者。分別觀之可也。

清の潘奕雋の書。奕雋は字は榕臯、乾隆己丑(34年 1769)の進士。第一卷は漢の章帝(57~88)、崔子玉(瑗78~143)、張芝(?~192)、鍾太傅(繇151~230)、索靖(239~303)、庾元亮、王右軍(羲之303~61)、王恬、王操之、王渙之、王獻之(344~86)、謝瑠伯、謝朏、王曇首、謝莊を臨するもの。自題に云う、裴几斎(不詳)の閣帖を借觀し、數則を節臨すと。第二卷は唐太宗(598~649)、虞世南(558~638)、歐陽詢(557~641)、褚遂良(596~658)、徐嶠之、李邕(678~747)、宋儋、顏魯公(真卿 709~85)、柳公權(778~865)を臨するもの。第三卷は蘇文忠(軾 1036~1101)、米南宮(芾 1051~1107)を臨するもの。米書は皆な陸謹庭所藏の紹興米帖の臨。第四卷は張東海(弼 1425~87)、劉廷美(珏 1410~72)、文徵明(1470~1559)、王濟之(鏊 1450~1524)を臨するもの。第五卷は趙子昂(孟頫 1254~1322)、董香光(其昌1555~1636)を臨するもの。第六卷。董香光を臨するもの。第七卷は少陵(杜甫)詩を書するもの。第八卷。潘世璜の董書を臨するもの。榕臯 董書を學びて、平実にして變化少なし。蓋し天資は工力に遜るも、其の篤學にして古を嗜むに至りては、根柢深厚にして、筆墨に俗氣無く、則ち學人の書にして、自ら一格を具う。必ずしも八法を以て相繩し、書家と長を挈(はか)り短を較べず。夫れ帖の用為るは、臨仿に資するに足る者有り、僅かに觀覽に備うる者有り。後人 先沢を珍守するに、凡そ力有る者は往往にして其の遺墨を刻し、永久に伝えんことを期す。此れは僅かに觀覽に備うるの帖にして、學書の必需する所に非ず。然れども亦た其の人の學力の淺深を規(うかが)うに足りて、書する所も亦た自ら廢すべからず。惟だに近賢の書する所、當に是の如き觀を作すべきのみに非ず、即ち叢刻中に列する所の古人の遺墨も、亦た其の人を重んじ其の學を重んじて、尽くは書法之美に属せしむるに非ざる者有り。分別して之を觀れば可なり。

[注]

- 1 三松堂墨刻八卷：『叢帖目4』三松堂墨刻10卷参照。卷数異同は以下の通り。法帖提要第4卷所収書跡は叢帖目では卷8。法帖提要第5卷は叢帖目卷4。法帖提要第8卷は叢帖目卷9。卷1、2、3、6、7には異同なし。
- 2 潘奕雋：1740~1830。江蘇吳縣の人。字は守愚。榕臯は一説に号。官は戸部主事に至った。
- 3 自題云：『叢帖目』では「裴幾斎閣帖」とある。
- 4 陸謹庭：陸恭(1741~1818)。江蘇吳縣の人。字は孟莊、謹庭は号。乾隆年間の挙人。
- 5 紹興米帖：『叢帖目3』紹興米帖4卷参照。
- 6 潘世璜：字は黼堂。号は理斎。潘奕雋の子。乾隆60年(1795)の進士。

(伊藤正紀)

【No235】

秦郵帖四卷¹ 秦郵四賢祠本

清師亮采輯。亮采字禹門。韓城人。嘉慶甲戌。署高郵知州。属金匱錢泳²。聚諸名蹟摹刻。置石於文遊台四賢祠。第一卷。蘇文忠春帖子詞。墨妙亭詩。煙江疊嶂圖詩。挑耳圖題後。第二卷。蘇文忠清虛堂詩。第三卷。黃文節梨花詩。呈外舅孫莘老詩。米南宮露筋祠碑。秦少游獲款帖。秦少章喜聞帖。第四卷。趙文敏書張文潛送秦少章序。董文敏書秦淮海詞。按此春帖子詞。與戲鴻堂三希堂兩本皆不同。直與坡書不類。墨妙亭詩。即依戲鴻重摹。戲鴻既誤収偽蘇。此不必論。挑耳圖題後乃王夢樓臨本。清虛堂詩。摹自聽雨樓³。以上四種及涪翁梨花詩。皆與蘇黃無涉。師禹門不別真偽。以錢梅溪之鑑賞為可信。不知梅溪徒負善鑑之名。其目力之拙。竟至不可思議。帖有阮文達題。亦梅溪書。云嘗見無錫秦小峴司寇藏少游墨竹。且有題識。如囑梅溪審定勒附帖後。亦佳即迹也。少游墨竹題識。當即寄暢園帖所刻。其偽不堪入目。阮公詎不之識。疑此跋亦梅溪偽造。否則文達何不自書。而付之梅溪乎。此帖殊無足觀。然尚有真者。比之澄鑑堂石刻。則較勝耳。

清の師亮采(1786~?)の輯。亮采は字は禹門、韓城の人、嘉慶甲戌(19年 1814)に高郵の知州に署し、金匱の錢泳に属し諸名蹟を聚めて摹刻し、石を文遊台の四賢祠に置く。第一卷は蘇文忠(軾)の春帖子詞、墨妙亭詩、煙江暈嶂図詩、挑耳図題後。第二卷は蘇文忠の清の虚堂詩。第三卷は黄文節(庭堅 1045~1105)の梨花詩、呈外舅孫莘老詩、米南宮(芾 1051~1107)の露筋祠碑、秦少游(觀 1049~1100)の獲款帖、秦少の章喜聞帖。第四卷は趙文敏(孟頫 1254~1322)書の張文潜送秦少章序、董文敏(其昌 1555~1636)書の秦淮海詞。按ずるに、此の春帖子詞は戲鴻堂と、三希堂の兩本皆な同じからず。直だ坡書とは類せず。墨妙亭詩は、即ち戲鴻に依りて重摹し、戲鴻は既に誤りて偽蘇を取む。此れ必ずしも論ぜず。挑耳図題後は乃ち王夢樓(文治 1730~1802)の臨本。清の虚堂の詩は聽雨樓より摹す。以上の四種及び涪翁の梨花詩は皆な蘇、黄と渉る無し。師禹門は真偽を別たず、錢梅溪の鑑賞を以て信ずべしと為すも、梅溪は徒だ鑑を善くするの名を負うを知らず。其の目力の拙なるは竟に思議すべからざるに至る。帖は阮文達(元 1764~1849)の題有り。亦た梅溪の書なり。云う、「嘗て無錫の秦小峴司寇(瀛 1743~1821)蔵の小游の墨竹を見て、且つ題識有り。梅溪に囑して審定し勅して帖後にして附するが如し。亦た佳迹なり。」と。少游の墨竹の題識は、当に即ち寄暢園帖の刻する所。其の偽なるは目に入るに堪えず。阮公詎ぞ之れを識らざん。疑うらくは此の跋も亦た梅溪の偽造。則ち文達何ぞ自書せずして之れを梅溪に付するや。此の帖殊に観るに足る無し。然れども尚お真なる者有り。之れを澄鑑堂の石刻に比ぶれば則ち較や勝るのみ。[注]

- 1 秦郵帖四卷：『叢帖目 2』に所収。
- 2 錢泳：清・乾隆24年(1759)~道光24年(1844)。字は梅溪・台僊ほか。江蘇省無錫の人。
- 3 聽雨樓：『叢帖目 4』に所収。

(大野愛)

【No236】

紅豆山齋法帖十卷¹ 寧郷劉氏本

清劉康輯。康字子寿、号瀟山樵、其子劉鶴、字雪樵、編次。第一卷、唐玄宗、宋蔡襄。第二卷、元趙孟頫、趙雍、耶律楚材。第三卷、明李東陽、王穉登。第四卷、明董其昌。第五卷、董其昌、文徵明、陳繼儒。第六卷、張瑞図、倪元璐、陶汝鼐。第七卷、陶汝鼐、清怡親王、成親王。第八卷、王紳、朱彝尊、宋犖、陳弈禧、陳鵬年、王式丹、史夔。第九卷、汪士鋐、陳邦彦、曹秀先、梁同書。第十卷、袁枚、翁方綱、秦大士、王文治、趙翼、陳希祖、魏衛。此本第二卷元人書欠。自明以下皆真迹。惟王紳書范文程勸諸王入関啓。乃陳弈禧筆。不知何以署王紳之名。紳不聞其工書也。唐玄宗鶴鵠頌。刻本多矣。此乃偽者。有靈巖山人蔵印。畢秋帆所蔵。此頌曾摹入經訓堂帖。与此絶非一本。筆勢单弱。冊首八分題額庸拙可厭。成化間錢仁夫題詩亦偽。奈何不取經訓堂刻一校正耶。蔡君謨臨智果書。其偽与鶴鵠頌相等。莆田書作莆岡。君謨何至乖謬如此。其書毫無筆意。劉氏竟不之弁。鮮于枢倪瓚二題。与蔡書一手偽作。劉康自題云²。吾楚邵陽車氏曾摹螢照堂帖十卷³。為海内所欣賞。余茲集非敢媲美車氏。用以公之同好。車氏所刻僅明一代人書。鑑別精審。劉乃高攀唐宋。又無識力。若去其首卷。亦未始不可觀也。

清の劉康(1814~90)の輯。康 字は子寿、瀟山樵と号し、其の子の劉鶴、字は雪樵の編次。第一卷は、唐の玄宗、宋の蔡襄。第二卷は、元の趙孟頫、趙雍、耶律楚材。第三卷は、明の李東陽、王穉登。第四卷は、明の董其昌。第五卷は、董其昌、文徵明、陳繼儒。第六卷は、張瑞図、倪元璐、陶汝鼐。第七卷は、陶汝鼐、清の怡親王(胤祥)、成親王(永理)。第八卷は、王紳、朱彝尊、宋犖、陳弈禧、陳鵬年、王式丹、史夔。第九卷は、汪士鋐、陳邦彦、曹秀先、梁同書。第十卷は、袁枚、翁方綱、秦大士、王文治、趙翼、陳希祖、魏衛。此の本は第二卷の元人の書欠く。明より以下は皆な真迹なり。惟だ王紳の書の范文程 諸王に入関を勸むるの啓は、乃ち陳弈禧の筆。何を以て王紳の名を署するやを知らず。紳は其の書に工なるを聞かず。唐の玄宗の鶴鵠頌は、刻本多きも、此れは乃ち偽なる者にして、靈巖山人(畢沅)の蔵印有り。畢秋帆の所蔵の此の頌は、嘗て經訓堂帖に摹入す。此と絶えて一本に非ず、筆勢は单弱。冊首の八分の題額は庸拙厭うべし。成化の間の錢仁夫の題詩も亦た偽。奈何ぞ經訓堂の刻を取りて一たび校正せざるや。蔡君謨臨する智果の書は、其の偽 鶴鵠頌と相等し。莆田は書して莆岡に作る。君謨何ぞ乖謬 此の如きに至らんや。其の書 毫も筆意無きも、劉氏竟に之

を弁せず。鮮于枢、倪瓚の二題は、蔡書と一手の偽作。劉康の自題に云う、「吾が楚の邵陽の車氏。曾て螢照堂帖十卷を摹し、海内の欣賞する所と為る。余の茲の集敢えて車氏に媲美するに非ず。用いて以て之を同好に公にす。」と。車氏の刻する所は、僅かに明一代の書のみにして、鑑別は精審。劉は乃ち高く唐、宋に攀り又た識力無し。若し其の首卷を去れば、亦た未だ始めより観るべからずんばあらざるなり。

[注]

- 1 紅豆山齋法帖十卷：『叢帖目2』に所収。道光29年(1849)の編。
- 2 劉康自題云：『叢帖目2』に所収。
- 3 螢照堂帖十卷：『叢帖目3』に螢照堂明代法書十卷の名で所収。

(和田勝美)

【No237】

寿金龕石刻四卷 長白瓜爾佳氏本

清斌良¹書。嘉慶庚辰勒。斌良字笠耕。官侍郎。其抱冲齋帖²已著録。此其自書。第一卷。臨米南宮小字千文。第二卷。臨趙松雪陳子昂感遇詩³。第三卷。臨松雪撫州永安禪院僧堂記。第四卷。縮臨蘭亭。並松雪十六跋。笠耕与其弟法良字可庵者。皆有文名。為滿州巨族。京師所居曰澹園。方小東朔為園中上客。小東集中澹園二十四詠。可見池館之盛。今廠肆所見書畫。多澹園旧蔵之品。而園亦久易主矣。笠耕學趙書。工整有余。筆力孱弱。蓋拘於應試之體⁴。臨南宮千文。尤無所似。尚不如臨趙之略具形模。既世席富厚。仕宦通顯。生承平無事之時。喜親風雅。与湯雨生⁵僧六舟⁶。有書畫金石之契。以其余暇。從事翰墨。雖限於資力。未能与書家頡頏。而用自怡悅。亦復遠於塵俗。此本刻印精美。閱之別有感触。其書得失。又可不論矣。

清の斌良の書、嘉慶庚辰(25年 1820)を勒す。斌良は字は笠耕、侍郎に官す。其の抱冲齋帖は已に著録す。此れは其の自書。第一卷は、米南宮(芾)の小字千文に臨す。第二卷は、趙松雪(孟頫)の陳子昂感遇詩を臨す。第三卷は、松雪の撫州永安禪院僧堂記を臨す。第四卷は、蘭亭、並びに松雪十六跋を縮臨す。笠耕と其の弟法良 字は可庵(壺羅)なる者とは、皆な文名有り。滿州の巨族と為す。京師の所居は澹園と曰う、方小東朔は園中の上客と為す。小東の集中の澹園二十四詠は、池館の盛を見るべし。今 廠肆に見る所の書畫は、澹園旧蔵の品多し、而れども園は亦た久しく主を易う。笠耕は趙書を学び、工整は余り有るも、筆力は孱弱。蓋し應試の体に拘わる。臨南宮千文は、尤も似る所無きも、尚お趙を臨するの略は形模を具うるに如かず。既に世よ富厚に席し、仕えては通顯に官し、承平無事の時を生き、喜んで風雅に親しみ、湯雨生 僧六舟と書畫金石の契有り。其の余暇を以て、翰墨に従事す。資力未だ書家と頡頏する能わざるに限らると雖も、而れども用て自ら怡悦し、亦た復た塵俗に遠し。此の本 刻印精美、之を閱るに別に感触有り。其の書の得失は、又た論ぜざるべし。

[注]

- 1 斌良：1784～1847。字は備卿。笠耕は一説に号。滿州の人。
- 2 抱冲齋帖：嘉慶25年(1820)の模勒。『叢帖目2』所収。
- 3 陳子昂感遇詩：臨趙孟頫擬陳子昂感遇詩並序のこと。
- 4 應試の體：館閣體、院體のこと。
- 5 湯雨生：湯胎汾(1778～1853)。字は若儀。雨生は号。
- 6 僧六舟：達受(1791～1858)。金石を愛好し、拓法に勝れた。

(長谷川翔一)

【No238】

古今楹聯彙刻十二卷¹ 山陰吳氏本

清吳隱輯刻。光緒庚子勒成。自明以迄近代。得聯三百余通。先以攝影法縮為小字。乃以上石。各列書人小伝於前。兪蔭

甫樾題²云。古無楹聯。自宋以來稍有見者。至明乃盛。近世文人。喜集碑帖字為之。如何子貞高伯足。皆集有成書。極裁雲剪月之巧。然集帖為聯則有之。集聯為帖則未有。石潛吳君工篆刻。尤精雙鉤。名人楹聯。縮小而刻之石。積十餘年。得十二冊。楊升庵謂³君謨小字。愈小愈妙。曼鄉大字。愈大愈奇。今以曼鄉之大字。化為君謨之小字。可謂奇奇妙妙矣。陶心雲濬宣題云。昔人以蘭亭聖教拓作大字。勒為榜署。包安吳詆之。以小字勢短。拓大則氣弱。而字畫傷直。若以大字縮為小字。則筆適勢曲。其妙不可思議。吳君此作。可悟小大之妙用。惜不得令慎扇見也。獨惜晚近之書。不解用筆。雖吳君苦心句縮。筆仍未適。勢仍傷直。則字運為之。陶氏評近代人書多微詞。而自謂作小字如大字。雖拓為擘窠。仍覺筆適勢遠。其學北書。用方筆而平順少變化。小書尤見筆弱。乃云。道因⁴遜其險俊。然乎。此刻字雖縮小。於原蹟形摸無異。聚數百家楹聯為小冊。亦洋洋大觀矣。

清の吳隱(1867~1922)の輯刻。光緒庚子(26年 1900)に勒成す。明より以て近代に迄るまで、聯三百余通を得て、先ず攝影法を以て縮めて小字を為し、乃ち以て上石し、各おの書人小伝を前に列す。俞蔭甫樾 題して云う、「古くは楹聯無し。宋より以來稍や見る者有り。明に至りて乃ち盛ん。近世の文人は喜びて碑帖の字を集めて之を為る。何子貞(紹基1799~1873)、高伯足(心夔1835~83)の如きは、皆な集めて書を成す有り。裁雲剪月の巧みを極む。然れども帖を集めて聯を為すは則ち之れ有り。聯を集めて帖を為るは則ち未だ有らず。石潛吳君(隱)は篆刻に工みにして、尤も双鉤に精し。名人の楹聯、縮小して之を石に刻し、十餘年を積み十二冊を得。楊升庵(慎1488~1559)謂う、『君謨(蔡襄1012~67)は小字愈いよ小なれば愈いよ妙。曼郷(石延年994~1041)は大字愈いよ大なれば愈いよ奇』と。今曼郷の大字を以て化して君謨の小字を為れば、奇奇妙妙と謂うべし」と。陶心雲濬宣 題して云う、「昔人は蘭亭 聖教を以て拓して大字を作り、勒して榜署と為す。包安吳(世臣1775~1855)之を詆るに、小字は勢短なれば、拓大すれば則ち氣弱く、而して字畫直に傷るを以てす。若し大字を以て縮めて小字と為せば、則ち筆適にして勢は曲、其の妙は思議すべからず。吳君の此の作は、小大の妙用を悟るべし。惜しむらくは慎扇(包世臣)をして見せしむるを得ざるなり。獨り惜しむらくは晚近の書は、用筆を解せざれば、吳君苦心して拘縮すと雖も、筆は仍お未だ適ならず。勢は仍お直に傷る。則ち字じ運びて之を為る」と。陶氏 近代人の書に評して微詞多し。自ら謂う。「小字を作ること大字の如し。拓して擘窠を為ると雖も、仍お筆適勢遠なるを覺ゆ」と。其の北書を学んでは、方筆を用いて平順にして変化少なし。小書は尤も筆の弱きを見る。乃ち云う、「道因も其の險俊を遜る」と。然らんや。此の刻字は縮小すと雖も、原蹟に於ては形摸して異なる無し。數百家の楹聯を聚めて小冊を為る。亦た洋洋たる大觀なり。

[注]

- 1 古今楹聯彙刻十二卷：『古今楹聯彙刻』は首集、十二支集、外集の全14類で構成されているが『叢帖目4』では13卷、宇野雪村『法帖事典』には12卷と記載されている。
- 2 俞蔭甫樾題：『春在堂全書』には未収。
- 3 楊升庵謂：王文才他『楊升庵叢書』より「東坡云…」として記載。『蘇軾詩集』卷18に見る。
- 4 道因：歐陽通「道因法師碑」のこと。

(村田萌)

【No239】

藏真律公帖一卷¹ 西安宋石本²

唐釈懷素書。宋元祐間刻³于長安漕台之南庁。素師遺迹多不可信。如大字千文之狂怪。小字千文之拘謹。直与醉僧無涉。真者惟宋刻聖母帖及此種耳。周越⁴題云⁵。有飛動之勢。若懸巖墜石。驚電遺光形容頗為微妙。越書為坡公所譏⁶。然此跋神觀非常。不愧書家之目。勝於十三行跋之真楷。其他伝作。亦極罕見。宋賢題識十餘家。無能与抗衡者。游景叔⁷楷書李白贈懷素草書歌於後。太白詩奇氣橫溢。雖率然落筆。亦如天馬行空。不可羈勒。豈有一庸腐語。素師自叙帖。備述贈序之作。以為榮寵。倘獲太白長篇。自必首拳其詞。詎有從略之理。此詩淺薄。幾於俗氣滿紙。正不待坡公直斥其偽⁸。其与太白他詩。直如薰蕕之不堪共器。而游景叔鄭重書之。附諸帖後。蓋未曾一詳審耳。近代叢帖多有懷素之迹。惟墨妙軒所摹苦筍⁹二行。与此書同一筆法。超逸絕塵。迥非狂怪拘束之千文等帖所可比擬。即周越數行亦足珍也。

唐の積懷素(736~?)の書。宋の元祐(1086~94)の間に長安の漕台の南庁に刻す。素師の遺迹は信ずべからざるもの多し。大字千文の狂怪、小字千文の拘謹の如きは、直ちに醉僧とは涉わる無し。真なる者は惟だ宋刻の聖母帖及び此の種のみ。周越 題して云う、「飛動の勢い有り。懸巖墜石、驚電遺光の若し」と。形容は頗る微妙と為す。越の書は坡公(蘇軾 1036~1101)の譏る所と為る。然れども此の跋の神觀なるは常に非ずして、書家の目に愧じず。十三行の跋の真楷に勝る。その他の伝作は、極めて見ること罕れ。宋賢の題識の十余家、能く抗衡に与かる者無し。游景叔 李白の懷素に贈る草書歌を後に楷書す。太白詩は奇気横溢、率然と落筆すと雖も、亦た天馬空を行き、羈勒すべからざるが如し。豈に一庸腐の語有らんや。素師の自叙帖は備さに贈序の作を述べて、以て榮寵と為す。倘し太白の長篇を獲ば自ら必ず首に其の詞を挙ぐ。詎ぞ略に従うの理有らんや。此の詩は浅薄にして、幾ど俗気は紙に満ち、正に坡公の直ちに其の偽を斥くを待たず。其れと太白の他の詩とは、直ちに薰蕕の器を共にするに堪えざるが如し。而して游景叔 鄭重に之を書し、諸を帖後に附す。蓋し未だ曾て一たび詳審せざるのみ。近代の叢帖は懷素の迹有るもの多し。惟だ墨妙軒の摹する所の苦筍の二行は此の書と同一の筆法にして超逸絶塵。廻かに狂怪拘束の千文等の帖の比擬すべき所に非ず、即ち周越の數行も亦た珍するに足るなり。

[注]

- 1 藏真律公帖一卷：『叢帖目』、『宇野雪村 法帖事典』に記載なし。
- 2 西安宋石本：西安碑林博物館の第3室に列置。
- 3 元祐間刻：元祐8年(1093)の刻。
- 4 周越：970~1028。字は子発、主客郎中に官す。
- 5 周越題云：刻帖(西安本)には「驚電遺光」とある。提要は「驚電遺光」の「遺」を「遺」に誤る。
- 6 坡公所譏：『東坡題跋』4卷に所収。
- 7 游景叔：游師雄(1037~97)。景叔は字。武功の人。
- 8 坡公直斥其偽：『東坡題跋』4卷に所収。題蘇才翁草書「然李白草書歌 迺唐末五代 効禪月而不及者」
- 9 苦筍帖：墨妙軒法帖(4卷)第2冊に所収。

(長村恵子)

【No240】

二王帖十卷 吳江董氏本

明董漢策鑄。漢策。字朝猷。以湯氏兼隱齋二王帖四卷乃木刻。易為刻石。而増入蘭亭黃庭曹娥畫贊樂毅宣示洛神七種為一卷。原帖上中下各析為二卷。目錄積文三卷。創始於嘉靖辛酉。與其子邦寧邦用邦典。分任摹勒。超廿有五年。至萬曆十三年乙酉工竣。其目錄積文。間附考證。吳郡彭履道¹以小楷書之。彭跋云。二王帖刻於江陰湯氏。摹勒固佳。惜其木本燥濕難調。過燥則滋膩之態失。稍濕則浸蝕之痕透。是以撫卷者有遺恨。吳江董君朝猷精摹搨。為吾伯父隆池先生所重。嘗論法帖。欲以江陰本刻石。隆先生曰。君能刻此。吾當為書積文以便學者。董君欣然有志。而工費浩繁。不能速弁。荏苒歲月。余伯父成古人矣。嗣後復積寒暑。董君志始就。余館松陵。董君以伯父旧盟俾余尋焉。不能以筆墨拙辭。書以塞董君之請。亦以購伯父生前之信。觀此知一帖之成良非易易。程南村²作帖考³。不曾見董刻。而引寒山金石林江陰湯氏⁴吳中陸氏並刻二王帖之語。又塗去湯字⁵。蓋疑湯氏為吳興兼隱齋。此江陰或別為一姓。別為一刻。不知湯氏實居江陰。曰吳興者郡望也。至陸氏本未有見者。其即董刻而寒山誤記歟。

明の董漢策の鑄。漢策、字は朝猷。湯氏兼隱齋二王帖四卷は乃ち木刻なるを以て、易めて石刻と為して、蘭亭、黃庭、曹娥、畫贊、樂毅、宣示、洛神の七種を増入して一卷と為し、原帖の上中下は各おの析けて二巻と為し、目錄、積文は三巻。嘉靖辛酉(40年 1561)に創始し、其の子の邦寧、邦用、邦典と、任を分けて摹勒す。廿有五年を越えて、萬曆十三年(1585)に至りて竣工す。其の目錄、積文の間に考證を附し、吳郡の彭履道小楷を以て之を書す。彭跋に云う、「二王帖は江陰湯氏に刻され、摹勒固より佳し。惜しむらくは其れ木本なれば燥濕調え難く、過だ燥けば則ち滋膩の態失われ、稍や湿えば則ち浸蝕の痕透る。是を以て巻を撫する者遺恨有り。吳江の董君朝猷は搨摹に精しく、吾が伯父の隆池先生の重ず

る所と為る。嘗て法帖を論じ、江陰本を以て石に刻さんと欲す。隆池先生曰く、『君能く此れを刻せば、吾当に積文を書して以て学ぶ者に便ならしむべし』と。董君欣然として志有り。而れども工費浩繁なれば、速弁する能わず。歳月を荏苒として、余の伯父 古人と成る。後を嗣いで復た寒暑を積み、董君の志始めて就る。余 松陵に館するとき、董君 伯父の旧盟を以て余をして尋がしむ。筆墨の拙なるを以て辞する能わず。書して以て董君の請を塞ぎ、亦た以て伯父の生前の信を贖う。」と。此れを觀て一帖の成るは良に易易に非ざるを知る。程南村 帖考を作るも、嘗て董刻を見ず。而して寒山の金石林の「江陰湯氏、吳中の陸氏並びに二王帖を刻す。」の語を引きて、又た湯字を塗去す。蓋し疑うらくは湯氏は吳興の兼隱齋為れば、此の江陰は或いは別に一姓と為し、別に一刻と為すか。湯氏は実は江陰に居り、吳興と曰うは、郡望なるを知らざるなり。陸氏本未だ見る者有らざるに至るは、其れ即ち董刻にして寒山の誤記なるか。

[注]

- 1 彭履道：未検。
- 2 程南村：姓は文榮。『聚学軒叢書』卷4に所収されており、「不曾見董刻」と同等の内容が見られる。
- 3 程南村帖考：程文榮『南村帖考』のこと。
- 4 引寒山金石林江陰云々：『南村帖考』(続構李遺書本)二王帖の項に「又明時江陰湯氏吳中陸氏、亦並刻有二王帖。寒山金石林古今書刻載之。」と見える。ちなみに趙均『寒山金石林部目』『寒山堂金石林時地記』には未見。
- 5 塗去湯字：前注4の表記を参照。

(庄子滉一)

【No241】

三朝宸誥二卷¹ 柏郷呂氏本

明董其昌書。柏郷呂兆熊官鳳陽巡撫²。以其祖新芳。父韜光及本身妻室所受三朝封誥乞董香光書之。計文十有六首。自題云。大司徒鴻原呂公。榮際三朝。所受綸詞皆出代言大手筆。極天下之選。公將鏤之樂石。藏之家廟。昭示子孫。蓋殷周盛時。功德之紀託諸鼎彝。今之制詞比於範金礪玉。每書一通。即題云右仿某人某碑³。虞褚顏李蘇米各家均有之。臨書不必形似。而於古人之情神析合無間。惟華亭為得此秘。繼華亭而起者則劉東武。其他或未之知。知矣而心与手或未能逮。思翁神与古会。能窺見古人真際。雖出臨仿。無殊自運。集諸家之長鎔於一冶。所謂文中有我。若專仿一人。貌合神離。即跬步不失。豈能免奴書之誚耶。夫学書必有本原。而臨仿不容拘泥。画人署款動曰臨摹某家某図。尚有非議之者。今於入石之書亦云臨某碑仿某帖。如画人之為者。香光此刻之外。殊属罕見。世人從而效之則謬矣。

明の董其昌(1555~1636)の書。柏郷の呂兆熊は鳳陽巡撫に官す。其の祖新芳 父韜光及び本身 妻室は三朝の封誥を受くる所を以て 董香光(其昌)に乞い之を書せしむ。計 文十有六首。自題に云う、「大司徒鴻原呂公は、三朝に榮際し、受くる所の綸詞は皆な代言の大手筆に出で、天下の選を極む。公は將に之を樂石に鏤み、之を家廟に藏し、子孫に昭示せんとす。蓋し殷周盛んなる時、功德の紀は諸を鼎彝に託す。今の制詞は範金礪玉に比(ちか)し。」と。一通を書する毎に、即ち題して云う、「右は某人某碑に仿う。」と。虞、褚、顔、李、蘇、米、各家均しく之 有り。臨書は必ずしも形似せずして、古人の情神に於て析合して間無し。惟だ華亭(董其昌)のみ此の秘を得と為す。華亭を継ぎて起つ者は則ち劉東武(塘 1719~1804)なり。其の他或いは未だ之を知らず。知るも心と手とは或いは未だ速ぶ能わず。思翁(董其昌)神は古と会し、能く古人の真際を窺い見る。臨仿に出づと雖も、自運に殊なる無し。諸家の長を集め一冶に鎔る。所謂文中に我有り。若し専ら一人を仿えば、貌合うも神離る。即ち跬歩も失わざれば、豈に能く奴書の誚を免れんや。夫れ学書は應に本原有るべし。而れども臨仿は容に拘泥すべからず。画人の署款は動もすれば曰く「某家の某図を臨摹す。」と。尚お之を非議する者有り。今 入石の書に於て亦た云う「某碑を臨し某帖を倣う。」と。画人の為す者の如し。香光は此の刻の外、殊に罕見に属す。世人従りて之を效うは則ち謬なり。

[注]

- 1 三朝宸誥二卷：三朝は万曆、泰昌、天啓。『叢帖目4』には「三朝宸誥三卷」とあるが、卷3は「書趙南星大友堂記 並自跋」で、宸誥ではない。

- 2 官鳳陽巡撫：『明督撫年表卷3』に、万曆14年(1586)の進士。天啓元年(1621)鳳陽巡撫に任ぜらるとある。
- 3 右仿某人某碑：『叢帖目4』に従って収録順にあげると「蘇軾宸奎閣記」「褚遂良書文皇冊文」「顏真卿家廟碑」「李邕雲麾碑」「米芾學記」「虞世南汝南公主誌」「褚遂良聖教序」。

(滑田一輝)

【No242】

琅琊帖一卷 沂水王氏

晋王羲之書。沂水王氏刻。失其名。並年月亦無考。琅琊今山東沂水。右軍之旧籍也。自淳化集刻大王書三卷。為右軍遺跡之總彙。惜王著暗于鑑別。真贋淆雜。經米元章黃長睿拊擊。証摭確鑿。無所逃遁。後之刻王書者。不得不加以審慎。如二王帖澄清堂¹之類。凡米黃所指斥悉予屏除。二家之於王書不無摧陷廓清之功。此本似非全帙。僅存大王書數十則。大都取材于淳化。凡偽造皆不復取。未必刻者自能鑑別。蓋依米黃之論斷作。去取之標準。雖於右軍筆法。未能盡傳曲折。而遒勁有力。尚非出自庸手。亦非明以後刻本可到。昔人謂蘭亭每刻。各有佳處。由其書本自超妙。刻者略伝大意。便已可觀。右軍他帖亦当如是。摹勒不同。神氣迥別。善相馬者。自可得之牝牡驪黃²外也。新搨本不曾見。其石存佚弗可知也。

晋の王羲之の書。沂水の王氏の刻。其の名を失う。並びに年月も亦た考ふる無し。琅琊は今の山東の沂水。右軍の旧籍なり。淳化 大王の書三卷を集刻してより、右軍の遺跡の総彙と為る。惜しむらくは王著は鑑別に暗く、真贋淆雜し、米元章 黄長睿の拊擊を経。証摭は確鑿し、逃遁する所無し。後の王書を刻する者は、加うるに審慎を以てせざるを得ず。二王帖 澄清堂の類の如きは、凡そ米黄の指斥し悉予して屏除す。二家の王書に於けるは摧陷廓清の功無くんばならず。此の本は全帙に非ざるが似し。僅かに大王の書 数十則を存するのみ。大都 材を淳化に取り、凡そ偽造は皆な復た収めず。未だ必ずしも刻者自ら能く鑑別せず。蓋し米黄の論断に依りて、去取の標準を作す。右軍の筆法に於て、未だ尽くは曲折を伝う能わずと雖も、而れども遒勁にして力有るは、尚お庸手より出づるに非ず、亦た明以後の刻本の到るべきに非ず。昔人 蘭亭は刻毎に各おの佳處有り謂うは、其の書 本より自ら超妙にして、刻者は略ぼ大意を伝え、便ち已に観るべきに由る。右軍の他帖も亦た当に是の如くなるべし。摹勒同じからずんば、神氣迥かに別なり。善く馬を相る者は、自ら之を牝牡驪黄の外に得べきなり。新搨本は曾て見ざれば、其の石の存佚は知るべからず。

[注]

- 1 澄清堂：澄清堂帖。南唐の後主李煜の刻と伝えられるが、宋・明の刻との説が多い。
- 2 牝牡驪黄：物事の外見にこだわらず、本質を見抜くことが大事であること。

(王思暢)

【No243】

敬勝齋法帖四十卷¹

清高宗御書。乾隆二十四年四月²誠親王等奉旨上石。第一卷至第四卷為御製文。第五卷至第十二卷為御製詩。第十三卷至第二十卷御書古人詩文。第二十一卷至第四十卷為御臨古今人書。學書多見古人真迹。得其用筆用意。所作自不同流俗。内府所藏既富。高宗天資亦優。弄翰尤勤。清代諸帝皆工書。而高宗詣力最為深厚。晚年益臻古澹。有從心不踰矩之妙。其生平得力在於香光。此帖臨古廿卷。董居其四³。於真行大小俱備。自來御書石刻卷帙之富亦無過此。全帖四十卷。為書二百六十餘種⁴。視淵鑑齋⁵康熙御書。四宜堂⁶雍正御書。多至數倍。可稱大觀。惟所臨書。有鍾繇薦季直表。柳公權尺牘。蘇軾墨妙亭詩。米芾天馬賦。蕭閒堂記不能弁原蹟之偽。於刻三希堂帖時。亦復採及多種。自來書家往往有味於鑑別者。又不独清高宗為然。今原石不知存佚。所見惟乾隆時搨本。墨光可鑑。其全帙不易得矣。

清高宗(乾隆帝 在位1735~95)の御書。乾隆二十四年(1759)四月誠親王(1716~73)等 旨を奉じて上石す。第一卷より第四卷に至るは御製文と為す。第五卷より第十二卷に至るは御製詩と為す。第十三卷より第二十卷に至るは御書の古人の詩文。第二十一卷より第四十卷に至るまでは御臨の古今人の書と為す。學書は多く古人の真迹を見、其の用筆と用意を得れば、作る所自ら流俗に同じからず。内府の所藏既に富み、高宗の天資も亦た優れ、翰を弄すること尤も勤。清代の諸帝は

皆な書に工みなるも、高宗の詣力は最も深厚と為し、晩年益ます古澹に臻る。心に従いて矩を踰えざるの妙有り。其の生平力を得るは香光(董其昌1555~1636)に在り。此の帖の臨古は廿卷。董は其の四に居る。真行大小に於ては俱さに備う。自来 御書の石刻巻帙の富も亦た此を過ぐる無し。全帖は四十巻、書二百六十余種と為し、淵鑑齋の康熙の御書、四宜堂の雍正の御書に視ぶれば、多きこと数倍に至る。大観と称すべし。惟だ臨する所の書には、鍾繇(151~230)の薦季直表、柳公権(778~865)の尺牘、蘇軾(1036~1101)の墨妙亭詩、米芾(1051~1107)の天馬賦、蕭間堂記の原蹟の偽を弁ずる能わざる有り。三希堂帖を刻する時に於て、亦た復た採りて多種に及ぶ。自来書家は往往にして鑑別者より昧き有り。又た独り清の高宗然りと為すのみならず。今原石は存佚を知らず。見る所惟だ乾隆時の搨本にして、墨光は鑑なるべし。其の全帙は得易からず。

[注]

- 1 敬勝齋法帖四十巻：『叢帖目』未収。影印本に中国書店、2016年刊の全4冊本がある。
- 2 乾隆二十四年四月：当該法帖の図版には「乾隆二十六年辛巳」と見える。また『国朝宮史』には「乾隆二十六年勒石」とある。従って上石時期に議論の余地がある。
- 3 董居其四：董書は敬勝齋法帖第37巻~第40巻に収録。
- 4 為書二百六十余種：尹一梅「《敬勝齋法帖》考」(『書法叢刊』2014年第1期)には、当該法帖は第2次鐫刻の時点で141種、第3次を含むと400種超とある。
- 5 淵鑑齋：『叢帖目』未収。
- 6 四宜堂：『叢帖目4』四宜堂法帖8巻参照。

(伊藤正紀)

【No.244】

蘭亭八柱帖八巻¹ 清内府本

乾隆四十五年己亥。以蘭亭三種及蘭亭詩勒於八石柱。第一巻虞世南摹蘭亭。第二巻褚遂良摹蘭亭。第三巻馮承素摹蘭亭。第四巻柳公権書蘭亭詩。第五巻戲鴻堂本蘭亭詩。第六巻于敏中補戲鴻堂本蘭亭詩。第七巻董其昌臨柳書蘭亭詩。第八巻清高宗臨董書蘭亭詩。所謂虞摹者。与戲鴻堂所刻本相同。因香光題為似永興。遂謂虞書。其實無可拠也。褚本後有米海嶽詩。然其帖亦類米筆。或即米氏臨本。馮本宋元人題跋尤多。三種皆墨迹。洵可珍貴。蘭亭詩既刻墨迹。兼重刻戲鴻堂本。而命于敏中臨補欠字。董臨本張得天旧蔵。析而為二。先後入内府。高宗自臨董書以為之殿。清内府刻帖。三希堂²墨妙軒³外。此種亦為極精雅者。鉤勒之精。出重刻淳化閣帖⁴以上。御題董書後云。字迹乃文人末芸。鑑蔵亦好古一端。子孫賢則可守。不肖則棄先業而不能保。字卷其小者。若天下大器。継緒者兢兢業業。庶乎永保。倘不知愛。与旧跡之銷亡無異。嗟夫。当国家全盛之時。安知有今日。乃於一物之微。垂為炯戒。一若預知其有今日者。讀此可為慨喟。蘭亭詩自宋以來。伝為柳書。究与他柳跡不類。吾謂唐人書之失名者。与景福殿賦⁵之稱孫過庭。同一例也。

乾隆四十五年(1780)の己亥、蘭亭三種及び蘭亭詩を以て八石柱に勒す。第一巻は虞世南(558~638)摹する蘭亭、第二巻は褚遂良(596~658)摹する蘭亭、第三巻は馮承素(617~72)摹する蘭亭、第四巻は柳公権(778~865)書く蘭亭詩、第五巻は戲鴻堂本の蘭亭詩、第六巻は于敏中(1714~80)戲鴻堂本を補う蘭亭詩、第七巻は董其昌(1555~1636)臨する柳(公権)書の蘭亭詩、第八巻は清の高宗(乾隆1711~99)臨する董書の蘭亭詩。所謂虞摹なる者は、戲鴻堂の刻本と相同じ。香光(董其昌)題して永興(虞世南)に似ると為すに因りて、遂に虞の書と謂うも、其の実拠るべき無きなり。褚本の後に米海嶽(芾1051~1107)の詩有り。然れども其の帖は亦た米の筆に類す。或いは即ち米氏の臨本ならん。馮本には宋元人の題跋尤も多し。三種は皆な墨跡、洵に珍貴すべし。蘭亭詩は既に墨跡を刻し、兼ねて戲鴻堂本を重刻し、而して于敏中に命じて欠字を臨補せしむ。董の臨本は張得天(照1691~1745)の旧蔵なり、析かれて二と為り、先後して内府に入る。高宗自ら董書を臨して以て之が殿と為す。清の内府の刻帖は、三希堂 墨妙軒の外、此の種も亦た精雅を極むと為す者にして、鉤勒の精なるは、重刻の淳化閣帖以上に出づ。董書の後に御題して云う、「字迹は乃ち文人の末芸、鑑蔵は亦た好古の一端。子孫賢なれば則ち守るべし、不肖なれば則ち先業を棄てて保つ能わず。字巻は其の小さき者なるも、天下の大器の若し。

緒を継ぐ者兢兢業業たらば、永く保つに庶し。倘し愛しむを知らずんば、旧跡の銷亡と異なる無し。」と。嗟夫。国家の全盛の時に当たり、安んぞ今日有るを知らんや。乃ち一物の微に於て、垂れて炯戒と為す。一に預め其の今日有るを知る者の若し。此を読めば慨喟を為すべし。蘭亭詩は宋より以来伝えて柳書と為すも、究に他の柳跡と類せず。吾謂えらく唐人の書の名を失う者は、景福殿賦の孫過庭(646~91)と称すると同一の例なりと。

[注]

- 1 蘭亭八柱帖八卷：『叢帖目4』参照。
- 2 三希堂：即ち『三希堂石渠宝笈法帖』。乾隆12年(1747)に内府所蔵の名跡を選んで刻石させ、魏晉から明末に至る名跡を網羅して32巻とした。梁詩正、汪由敦等が勅を奉じて校刻した。
- 3 墨妙軒：即ち『墨妙軒法帖』。三希堂法帖上石後に内府に帰した秀れた筆跡を続編にしたもの。
- 4 重刻淳化閣帖：即ち『欽定重刻淳化閣帖』。乾隆帝は内府所蔵の各種の淳化閣帖の中から最良本を選出し、于敏中等に命じて古今の著録を参照しつつ考証させて偽を正し、積文を加え、排列を改めて、面目を一新したもの。
- 5 景福殿賦：巻末の宋の曾肇の跋によって、孫過庭の書と呼ばれている。原本は紙本、高さ29.2cm、長さ600cm、全巻は165行。

(陶坤)

【No245】

宝雪齋趙帖二卷¹ 瑞応律院本

元趙孟頫書。後題云。康熙歲在戊戌孟冬穀旦薰沐勒石瑞応律院。刻者不知何人。瑞応律院亦不知何地。上卷姜白石蘭亭考。絶交書。襄陽歌。勉学賦。間居賦。下卷真賞齋²銘。董其昌書金剛經。真賞齋為明華東沙蔵書之室。銘辭有欠。署款亦失。未詳何人書。又董書金剛經欠前數葉。凡宝一物。必深知其可宝之處。而特加珍惜。不与泛常者等列。松雪書上法二王。力追有唐諸家。詣力之深。數百年罕其倫匹。所書既多。流传不乏善本。収趙書者宜選其至精之作。壽之貞石。為学者法。乃此刻名成宝雪。而所取諸帖未盡美善。松雪書名既著。臨仿遂多。真贋最難區別。如絶交書。鴻堂之刻乃不全本。而此与三希堂皆全文。書家於古人文字固有屢書不一書者。既出一手。相去当不甚遠。以此与鴻堂本互校。優劣懸殊。正如思翁所譏為鈍滯³吳興者。蘭亭考小楷極秀媚。而吳興他書似不如是之弱。然則刻此帖者雖以宝雪名齋。於趙書之如何可宝。或未深知。以松雪書名之盛。珍重焉而已。至摹勒董書及不知何人之書。均名趙帖。則更難於索解。帖肆裝帖。每去其題識歲月以充旧刻。致使刻帖之人無由考知。亦憾事也。

元の趙孟頫(1254~1322)の書。後題に云う。「康熙 歲は戊戌(1718)に在るの孟冬穀旦 薰沐して瑞応律院に勒石す。」と。刻者は何人なるやを知らず。瑞応律院も亦た何れの地なるやを知らず。上卷は姜白石(夔 1155~1221)の蘭亭考。絶交書。襄陽歌。勉学賦。間居賦。下卷は真賞齋銘。董其昌書金剛經。真賞齋は明の華東沙(夏 1490~1572)の蔵書の室と為す。銘辭に欠有り。署款も亦た失い、未だ何人の書なるやを詳らかにせず。又た董書金剛經前數葉を欠く。凡そ一物を宝とするは、必ず深く宝とすべきの所を知り、而して特に珍惜を加え、泛常なる者と列を等しくせず。松雪の書 上は二王を法とし、力めて有唐の諸家を追い、詣力の深きこと、數百年其の倫匹罕なり。書する所既に多く、流传するもの善本に乏しからず。趙書を収むる者は宜しく其の至精の作を選び、之を貞石に寿しくし、学ぶ者の法と為すべし。乃ち此の刻名づけて宝雪と為すも、而れども取る所の諸帖は未だ尽くは美善ならず。松雪(趙孟頫)の書名は既に著れ、臨仿するもの遂に多く、真贋は最も區別し難し。絶交書の如きは、鴻堂(卷15所収)の刻は乃ち全本ならず、而れども此れと三希堂(卷19所収)とは皆な全文、書家は古人の文字に於て固より屢しば書して一書ならざるもの有り。既に一手に出で、相去ること当に甚だしくは遠からざるべし。此を以て鴻堂本と互いに校ぶれば、優劣は懸殊、正に思翁(董其昌)の譏りて鈍滯の吳興と為す所の者の如し。蘭亭考の小楷は極めて秀媚。而して吳興の他書は是の如きの弱きにあらざるに似る。然らば則ち此の帖を刻する者は宝雪を以て齋を名づくと雖も、趙書の如何に宝とすべきに於ては、或いは未だ深く知らず。松雪の書の盛んなるを以て、焉を珍重するのみ。董書及び何人の書なるやを知らざるを摹勒し、均しく趙帖と名づくるに至りては、則ち更に索解に難し。帖肆 帖を装するに、毎に其の題識の歳月を去りて以て旧刻に充て、刻帖の人をして考知するに由

無からしむるを致す。亦た憾む事なり。

[注]

- 1 宝雪齋趙帖二卷：『叢帖目4』所収。
- 2 真賞齋：『叢帖目1』所収。真賞齋帖3巻参照。
- 3 鈍滯：『容台集』巻4「題跋 書品」に「吳興此書学黄庭内景經、時三十八歳、最為善者機也。成名以後、隳然自放、亦小有習氣。於是贗畫乱之、鈍滯吳興不少矣。」とある。

(大野愛)

[No246]

月輪山壽藏記二卷¹ 杭州吳氏本

清張廷濟書。道光間錢塘吳公謹官鬱林州。婦里時營壽藏於武林之月輪山。築室種樹。自製文記之、又為詩十二首。屬張叔未書之。胡駿聲芭香為之図。阮文達題額。并為作序。吳字修梅。号鉄琴。文達第九女穉雅之壻。序言修梅在広西。官直隸州牧曾署南寧府。到处有政声。以拘謹之考。降官而歸。在錢江月輪山得地十許畝。遂經營之曰嶼台。曰く瑛亭。曰銀池。因樹為屋。開門見山。可以望月。可以看潮。亭柱刻成句云。月落江湖白。潮來天地青。嶼亭梅三百六十株。刻聯云。前身應是明月。幾生修到梅花。吾女雖常病。得此藏地亦致佳。他年吾為丁令威²。必常由西湖來月輪山。望爾夫婦兒孫花木也。此文達之序。亦其自書。雋永有致。又評張書云。叔未解元書法米海嶽。不狂不枯。力透紙背。可為眉壽之徵。叔未為文達門人。書此七十有八。昔項子京藏晋人鉄琴³。故称天籟閣。道光時、琴為吳修梅所有、因有此号。際承平之会、士之官成帰郷者、以清間之身。為風雅之事。老輩復以文字張之。流伝於後。遂成雅玩。觀此令人神遊其地。今之村居者、時有戒心。衣食稍充之家。則懼禍至無日、避匿城市、雖欲享林泉之樂。亦豈可得。鉄琴洵福人哉。陳繼昌題云。叔未書不落甜熟一派。可與儀徵相国之文並壽千古。猶漫叟浯溪之磨崖碑。尚非泛泛推許者耳。

清の張廷濟(1768~1848)の書。道光の間 錢塘の吳公謹 鬱林州に官す。里に帰りし時、壽藏を武林の月輪山に営み、室を築き種を樹え、自ら文を製り之に記し、又た詩十二首を為り、張叔未に属して之を書せしむ、胡駿聲芭香 之が図を為る。阮文達(元 1764~1849)題額し、並びに為に序を作る。吳は字は修梅、号は鉄琴。文達の第九女 穉雅の壻。序に言う。修梅は広西に在りて直隸州牧に官し、曾て南寧府に署す。到る處政声有り。拘謹の考を以て降官して歸る。錢江の月輪山に在りて地十許畝を得、遂に之を經營す。曰く嶼台。曰く瑛亭。曰く銀池。樹に因つて屋を為り、門を開きて山を見れば、以て月を望むべく以て潮を看るべし。亭柱に成句を刻して云う、月落ちて江湖は白く、潮來りて天地は青し。と。瑛亭に梅三百六十株あり。聯を刻して云う、前身は是れ應に明月なるべし、幾生か梅花に修到す。と。吾が女は常に病むと雖も、此の藏地を得て、また佳を致す。他年吾れ丁令威と為り、必ず常に西湖より月輪山に來たり、夫婦の兒孫の花木を望まん。と。此れは文達の序。また其の自書。雋永にして致有り。又た張の書を評して云う、叔未解元の書は米海嶽を法とし、狂わず枯れず、力は紙背を透る。眉壽の徵と為すべし。と。叔未は文達の門人為り。此れを書すは七十有八。昔 項子京(元汴 1525~90)晋人の鉄琴を藏す。故に天籟閣と称す。道光(1821~50)の時、琴は吳修梅の所有と為り、因りて此の号あり。承平の会に際し、士の官成りて郷に歸る者、身を以て清間の、風雅の事を為し、老輩復た文字を以て之を張り、後に流伝し、遂に雅玩と成る。此れ人をして神 其の地に遊ばしむ。今の村居する者は、時に戒心あり。衣食稍や充つるの家は、則ち禍の至ること日無きを懼れ、避けて城市に匿れ、林泉の楽しみを享せんと欲すと雖も、亦た豈に得べけんや。鉄琴は洵に福人なり。陳繼昌の題に云う、叔未の書は甜熟の一派に落ちず、儀徵相国の文と並びに千古を寿しくすべし。と。猶お漫叟の浯溪の磨崖碑のごとく、尚お泛泛として推許する者に非ざるのみ。

[注]

- 1 月輪山壽藏記二卷：『叢帖目3』所収。
- 2 為丁令威：『搜神後記』第1篇に「丁令威、本遼東人。学道于靈虛山。後化鶴歸遼、集城門華表柱。」とある。
- 3 項子京藏晋人鉄琴：北京故宫博物院所藏に同名の仲尼式の鉄琴があるが、明代の倣古品。琴底龍池(第一共鳴孔)上に小篆「天籟」二字がある。

(和田勝美)

【No.247】

昭潭名人法帖四卷¹ 湘潭馮氏本

清馮準輯。準字此山。書者皆湘潭一邑之人。卷一。明周星九煙、李馭芳翔雲、王岱了庵、唐世征魏子、郭幼隗。卷二。陳鵬年滄州、張璩湘門。卷三。李觀正端友、羅典慎齋、曹試辛庵。卷四。羅修源碧泉、秦定閔涵谷、陳潭嶼、張九鉞度西、宋本敬賓門、周新霽晴川、胡師孟浩如、張顧堂、周系英石芳。共十九家。此山跋云。吾邑王山長以書畫馳名海內。陳滄州張湘門繼之。其書存於邑者不多見。往歲羅硯生歐陽曉岑有摹刻之議。未果行。準不自揣集諸公書彙刻之。黃少崐助予搜索。有獲之望外者。一斑片羽。聊使後進得見前輩風規。勒成於同治丁卯。數十年間已多殘損。如郭幼隗陳潭嶼張顧堂等均失其名。周九煙七歲工書。所臨黃庭曹娥樂毅。皆八歲之作。雅飭有法。董文敏作跋深為推挹。明時曾刻石。而世鮮伝本。此帖所収。為周石芳得之江南者。周於道光時任江蘇學政²也。邑人輯刻鄉先輩書。採撫較易。真偽亦易弁別。馮氏此帖可以為法。倘各邑仿而行之。則僻地書家所作不至散佚。惜好事者少。或無其力。雖有可伝之書。亦復泯焉無聞為可惜耳。清の馮準の輯。準は字は此山、書者は皆な湘潭一邑の人。卷一は明の周星九煙、李馭芳翔雲、王岱了庵、唐世征魏子、郭幼隗。卷二は陳鵬年滄州、張璩湘門。卷三は李觀正端友、羅典慎齋、曹試辛庵。卷四は羅修源碧泉、秦定閔涵谷、陳潭嶼、張九鉞度西、宋本敬賓門、周新霽晴川、胡師孟浩如、張顧堂、周系英石芳、共に十九家。此山の跋に云う「吾が邑の王山長(岱)は書畫を以て名を海内に馳せ、陳滄州、張湘門之を繼ぐ、其の書の邑に存する者は多くは見ず、往歲 羅硯生、歐陽曉岑 摹刻の議有り、未だ果行せず。準自ら揣らず、諸公の書を集め之を彙刻し、黃少崐 予を助け搜索し、之を望外に獲る者有り。一斑片羽なるも、聊か後進をして前輩の風規を見るを得しむ。」と。同治丁卯(6年 1867)に勒成す。數十年の間已に残損多し。郭幼隗、陳潭嶼、張顧堂等の如きは均しく其の名を失う。周九煙は七歳にして書を工にし、臨する所の黃庭 曹娥 樂毅は、皆な八歳の作にして、雅飭の法有り。董文敏 跋を作りて深く推挹を為す。明の時曾て石に刻するも、世に伝本鮮なし。此の帖の収むる所は、周石芳 之を江南の得る者と為す。周は道光の時 江蘇學政に任ぜらるなり。邑人 郷の先輩の書を輯刻するは、採撫は較や易く、真偽も亦た弁別し易し。馮氏の此の帖は以て法と為すべし。倘し各邑仿いて之を行はば、則ち僻地の書家の作る所は散佚に至らず。惜しいかな好事者は少く、或いは其の力無し。伝うべきの書有りと雖も、亦た復た泯びて聞こゆる無きは惜しむべしと為す。

[注]

1 昭潭名人法帖四卷：『叢帖目2』所収。

2 任江蘇學政：『學政年表』によれば道光4年(1824)に就任するも、病をもって免ぜられたことがみえる。

(長谷川翔一)